母上からは、特にそなたの今後のことについてたのまれました。……今日ただ今からは、あきらめてわしの指示に従うように。」

これを聞いて、五郎はぼう然として声も涙も出ませんでした。気を失なったようにそこに眠ってしまい、肩をたたかれて起こされたのは、真夜中でした。あんどんに火を入れた清助おじは、五郎が武士の子の姿でいるのは危険だから、百姓の姿に改めた方がよい、といって、五郎の髪の毛をそり落として丸坊主にし、留吉の子供の古着や野良着に着がえさせました。そして五郎の衣服や刀を屋根裏にかくしてしまいました。この夜こそ、五郎にとって武士の子の姿の最後の日となったのです。

五郎の面川沢での生活は、次の年（明治二年）の六月まで続きました。ここでの九ヵ月の日々は、五郎にとって生涯忘れることのできない悲しい思い出として、深く心にきざまれていきました。面川沢では、勉強しようにも、本